
フレンド～友達だなんて思っちゃいけなかった～

思惟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フレンド～友達だなんて思っちゃいけなかつた～

【著者名】

Z0905B

【作者名】 思惟

【あらすじ】

あなたの隣にいるのは友達ですか？学校生活での日常のある出来事。

友達だなんて思つちや いけなかつた。』

あれはいつかとなんらかわらない出来事だと思つてた。

いつもと同じようにふざけあってただけで。
でも、あまりにも尚がしつこかったから。

殴つてしまつた。

軽くだけど。

おまけにこんな事まで語りてしまつた。

『馴れ馴れしいな。…… ウザつ』

言つた後すこく後悔した。
あの時の尚の顔といつたら……

一瞬、無表情になつて笑顔に戻つた。でもとっても寂しそうな笑顔
だつた。

『「うわっー・ヒドイッ』

でもそつと言つたからいつも同じで大丈夫だと思つた。

いつもとかわらないと。

そつ思い込んでた。

勝手に。

次の日の朝。

尚はいつも遅刻、ギリギリで学校に行く。

これはいつもの事。

5分前の予鈴が鳴る。

尚はまだ来ない。

「ねえ、明。尚って最近つざくない？」

何の話のつながりでこんな会話なったのか思い出せないけど、いきなり真衣がそう言い出した。

「そうかな？」

私は、はつきり言つことができなかつた。

だつて正直にいうと最近尚にイラつく事が少なくなかつたから。でもそれをはつきり人前で言えるほど私の怒りはなかつた。

「私はダメだな。見ると本当にイラつく。しつこいんだよね。そう思わない？」

そういうえば真衣は前々から尚を嫌つていた。

クラス替えしたばかりのときはそうでもなかつたが慣れていくうちにお互い合わないのが分かつたのか段々離れていつた。

二人が合わないのは真衣が大人過ぎ、尚が子供っぽいからだろう。

「さあ？」

私は「こ」で否定とか賛成とか決めるのが面倒で嫌で適当に返事を返した。

本当なら「こ」で逃げずに素直に言つべきだった。

本鈴が鳴る少し前に尚が慌てて入ってきた。

真衣と話していたすぐ近くの後ろのドアから。

話を聞かれたかなつと焦つたが、尚は笑顔で元気よくあこせつして
きたからそれはないようだつた。

尚はよく寝てこる」とが多いが、その口は尚は机に顔を伏せて寝て
いる時間がいつもより多かつた気がする。

結局その日、尚とした会話は朝のあこせつと授業変更のことだけだ
つた。

それ以外はいつもと特に変わりなく過ぎていった。

次の日。

尚はまた遅刻きつざりでくるのかなつと思つてこるひびに本鈴がな
つてしまつた。

尚は朝のホームルームが終わつても来なかつた。連絡はまだ入つて
いないそうだ。

尚は1時間目が終わつてもお昼になつても午後の授業が始まつても
姿を見せなかつた。1年の時から休んだことのない尚はその日来な
かつた。

メールしても返事は返つてこなかつた。

次の日、尚が休んだ理由が分かつた。交通事故にあつたそだ。

確か尚は自転車通学だつた。前に一緒に帰つたが尚の運転は見ていてとつても危なつかしいものだつた。軽い接触事故だつたらしので怪我 자체はそんなにひどくないらしい。来週には退院できるそだ。

心配で大丈夫かな？お見舞いに行こうと思つたが3日前のことが頭によみがえり行くのためらつたが今はそんな事はいつてらないと思ひ帰りいこうと決心した。

その日の放課後。私は先生に尚の入院した病院を聞いて見舞いへと向かつた。

尚の入院していたのは市内の総合病院だつた。病室の名前の欄は尚だけようだつた。

病室のドアに手をかける。

なんだか、あけるのをためらつてしまつ。

そんなふうに迷つてゐると、ドアの隙間から声が聞こえてきた。

泣きじゃくるよつな声に心をなだめるよつな青年の姿。

「大丈夫？」

「うう・・・あべね・・・」

「考え方」としながら自転車乗るのは危ないって前から言ってたろ。」

「うん。」

そういうえば前に尚が言つていた。年下の癖に私よりしつかりした、従姉妹がいると。名前は確かすぐる。

「来週から行けそう?」

「……行けない。」

か細く今にでも倒れてしまいそうな返事。

「友達とケンカでもしたの？」

「……違ひよ」

澄んでいて悲しみがあふれだしそうな小さな声だった。

「じゃあ、どうして？」

「…………クラスメートの………… 明ちゃん」

中々続かない言葉にすぐるのが優しく問い合わせる。

「何があったの？」

「嫌われてたの………… 明ちゃんに………… 友達だなんて思っちゃいけなかつた………… 明ちゃん………… グスッ…………」

「………… 尚」

一つ一つの言葉から尚がどれだけ苦しみ泣いたのかが覗えた。^{うかが}

尚は声をあげながら泣いてた。

その後どうなつたのか私は知らない、尚の泣いている声を聞きたくなかつたから。

尚の言葉が頭から離れない。

『友達だなんて思っちゃいけなかつた…………』

やつぱり聞いていたんだろ？。一昨日の朝の真衣との話しが、尚が泣く程、考え悩みこむなんて思わなかつた。

普段から尚はいつも笑つていて感情がつまく読み取れなかつたし、さつきみたいに泣いてるところも見たことがなかつた。

はつきり言つてショックだった。

尚は傷ついたりしない。

普段の尚を見ているといつも笑つて悲しむなんてしないような子だと勝手に思つていた。

身近すぎて、分からなくなつてた。

尚がどんなときに怒つて、いつ笑つて、何の話をするとき喜んだのか、そして何を言つたら悲しむのか。

ずっと近くにいたのに。

何一つ分からなくなつていた。

尚はなんでも笑つて物事を流せるほど大人じゃなくて

十七歳のただの普通の女の子で

みんなと同じ絶妙で独特的なバランスな感情の中にいた。

なにも言わないから、怒らないから、悲しまないから、

なにを言つても大丈夫だと思つてた。

本当は全然そういうじゃないのに。

全然平氣なはずなのに。

『友達だよ』つて一言 真衣と話しているときに『え、ば尚ほ』こんなふに悩んで泣かずにはんだかもしれない。

悩みすぎて事故にあうこともなかつたかもしれない。

私は尚をちゃんと見ていなかつた。

でも尚を嫌いになつたわけじゃない。

ただ言葉がたりなかつただけ。

『友達だよ。』

明日に言つに行こう。

泣かせて懲しませてしまつた尚に。

きつと今私は目が赤くて恥ずかしくて行けないないから。

明日必ず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0905b/>

フレンド～友達だなんて思っちゃいけなかった～

2010年10月10日06時38分発行